

## イザヤ書9章8節－10章「神の民と異邦人の高ぶり」

### 1A 主のことばを侮る民 9

1B 自力の建て直し 8－12

2B 主を求めない指導者 13－17

3B かみ合う民 18－21

4B 不正な裁判 10:1－4

### 2A 神の主権を認めない国 10

1B 国々を倒す欲望 5－11

2B 造り主への器の高ぶり 12－19

3B 残りの民の立ち返り 20－26

4B 倒れる高い木 27－34

## 本文

イザヤ書 9 章を開いてください、今回は 9 章 7 節まで学びました。8 節から見ていきます。私たちは、7 章から、アラムと北イスラエルが、南ユダに攻めていくため共謀したことを背景にした預言を読んできました。しかし、主は彼らの企みが失敗するように意図しておられました。しかし、ユダの王アハズは、主により頼まずに、北からくる大国、アッシリアに、この二つを攻撃するように頼みます。アッシリアは、それを行いました。アラムはアッシリアによって滅び、同じく北イスラエルも、紀元前 722 年にサマリアが陥落します。それをユダが喜んだのは束の間で、アッシリアはユダの町々にも攻め入ってきます。そして、エルサレムだけが残りますが、主がアッシリアから救われる預言を読みました。

そして 9 章 8 節から、北イスラエルに対する預言になっていきます。主は、エルサレムとユダに預言を与えられましたが、イスラエルも忘れておられません。主の教えと証しが大事であることを、主はイザヤに教えておられましたが、同じように、主のことばをイスラエルにも与えます。それに対して、北イスラエルがどう応答するか？を見ていきます。

### 1A 主のことばを侮る民 9

1B 自力の建て直し 8－12

<sup>8</sup> 主はヤコブに一つのことばを送られる。それはイスラエルに下る。<sup>9</sup> この民、エフライムとサマリアに住む者たちはみなそれを知り、高ぶり、思い上がって言う。

主は、預言者たちを遣わして、イスラエル王国に対してことばを送られました。エフライムは、北イスラエル王国における、代表的な部族です。ヨセフの息子エフライムとマナセがいましたが、ヤコ

ブは、どちらも自分の手を二人に置いて、祝福しました。そうすることによって、二倍の分け前をヨセフに与えたのです。ヤコブが死ぬ間際に、ヨセフに与えた預言は、その相続地が肥沃になることです。「創 49:22 ヨセフは実を結ぶ若枝、泉のほとりの、実を結ぶ若枝。その枝は垣を越える。」ところで、エフライムが弟でマナセが兄ですが、ヤコブは手を交差して、右手でエフライムを祝福して、エフライムがマナセに先になりました。それで、エフライムが北イスラエルで代表的な部族となり、エフライムと呼ばれたら、それは北イスラエル全体を指すことが多いです。そして、サマリアとありますが、これはもちろん、サマリアの首都です。

イザヤが預言を行っていた時にはすでに、北イスラエルには、いろいろな預言者が遣わされてきました。初代のヤロブアム王にも、彼が偶像礼拝を祭壇で献げている時に、ユダから無名の預言者がやってきて、後にヨシヤと呼ばれる王が出てきて、これらの祭壇が殺された人々の骨で焼かれる、つまり、祭壇が汚されて、神の裁きが行われることを宣言しました。そして、イスラエルには、預言者たちの代表的存在、エリヤが現れます。それからエリシャが彼の働きを引き継ぎます。そして、その後、ホセアがいて、ヨナ、またアモスがいきました。

エリヤの後の預言者たち、ホセアとアモスがイザヤと同期です。その時は、ヤロブアム二世の治世です。北イスラエルの中で、最も栄えていた時でした。しかし、その繁栄の後には、まるで、綿飴のように、瞬く間に弱くなり、アッシリアに滅ぼされて行きます。その繁栄の時に、預言者たちが、主のことばを語ったのです。そこで、彼らの反応がこのようなものなのです。「高ぶり、思い上がって言う。」主から語られていた警告に対して、高ぶっていました。思い上がっていました。

<sup>10</sup>「れんがが落ちたから、切り石で建て直そう。いちじく桑の木が切り倒されたから、杉の木でこれに代えよう。」

イスラエルは、周囲の敵によって攻撃を受け、それで建物が破壊されることがありました。また、木々を切り倒されることがありました。しかし、彼らは、そこでこれらが主からの注意喚起であることを認めなかったのです。そうではなく、自分たちで建て直せばよいと思ったのです。また、植え直せばよいと思ったのです。しかも、その破壊されたところを、さらに良いものに変えていけばよいとしました。他からの助けなしで、神からの助けなしで、自分たちでやっていけますという態度を、主はここで、「高ぶり、思い上がっている」と言われているのです。

これは、まさに、我々、現代人に対することばではないでしょうか？また、現代の日本人に対する言葉ではないでしょうか？主は、時に災いが起こるのをお許しになられます。それは、自分たちのいのちを支え、豊かにされているのは、天地を造られた神ご自身であることを知るようになるためです。ところが、何か災いが起これば、自分たちで何とかやり直して、建て直せばよいだろう。破壊されても、それをやり直しの良い機会として、以前よりも良いものにしていこうとします。

これは、とっても良いことです。良い考えです。けれども、神なしでそのことを考えたら、高ぶり、思い上がりなのです。人は、良い意味で倒産しないといけないのです。自分が、靈的にもう何も無いのだと認めないといけないのです。そうすることによって、初めて自分の上に天の神がおられることを知ることができます。そして、悔い改め、憐れみをこうことができます。その中で、主が建て直しの働きをされるのを、受け入れつつ歩むのです。

<sup>11</sup> そこで主は レツインに敵対する者たちをのし上がらせ、その敵たちをあおりたてる。<sup>12</sup> 東からはアラムが、西からはペリシテ人が、その口いっぱいイスラエルを食らう。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

レツインは、アラムの王です。思い出してください、イスラエルの王レマルヤが、アラムの王レツインと共謀して、南ユダを攻めてきました(7:1)。北イスラエルは、アラムと手を結んだのです。主により頼まず、周囲の国と連携することによって、安全保障を確保しようとした。ところが、アラムと手を組んだことによって、今度は、アラムの敵もまた、北イスラエルに攻めてくるようになりました。東からはアラムがやってきたとあります。ここの「アラム」は、レツインの治めていたアラムではありません。アラムという地域は非常に大きく、レツインの治めていたアラムの国もあれば、他の王が治めていたアラムもありました。そのアラムから攻められました。また、ペリシテ人が地中海沿岸地域から攻めてきます。

このようにして、主ではないものにより頼めば、主が救われるのではなく、問題を解決するために行ったことが、かえって問題を自ら招いていくことになるのです。

そして、「それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。」とあります。これは、何度か、これからも繰り返される言い回しです。これは、主がこのように注意喚起をしておられるのに、それでも彼らが気づかない、彼らがへりくだらないので、それで主は次の、もっと厳しい取り扱いをされるという意味です。主は、人を苦しめることを喜びとしません。けれども、立ち返ることを願っておられます。だから、むやみに苦しみを与えられません。しかし、立ち返るために、初めは小さな声で語って、次にもっと大きく、そして、さらに大きな声をかけられるのです。

## 2B 主を求めない指導者 13-17

<sup>13</sup> しかし、この民は自分を打った方に帰らず、万軍の主を求めない。

イスラエルを、周囲の国々が食らっているのに、それでも、主ご自身に帰ってきませんでした。そして、戦ってくださる方は神であり、万軍の主であるのに、それでも求めなかったのです。そこで、主は、彼らの頼っている二つのものを断ち切られます。

<sup>14</sup> そこで主はイスラエルから、かしらも尾も、なつめ椰子の葉も葦も 一日のうちに断ち切られる。  
<sup>15</sup> そのかしらとは長老や身分の高い者。その尾とは偽りを教える預言者。<sup>16</sup> この民を導く者は迷わす者となり、彼らに導かれる者は惑わされる者となる。

長老や身分の高い者、すなわち政治的な指導者たちを断ち切られます。それから、偽預言者たちを断ち切ります。民の指導者は悪い者たち、彼らを迷わす者たちです。北イスラエルの末期の王たちは非常に短命であり、その家来によって暗殺されて、その家来が王となって、さらにその家来が王を暗殺するという歴史でした。

さらに、偽預言者も取り除かれますが、長老たちがかしらに喩えられ、偽預言者は「尾」に喩えられているのは、なぜか？それは、指導者の意向をただ追従して、それを神の名によって確認しているだけだったからです。真の預言者は、王や民の意向に真っ向から対立していても、時流に迎合しない言葉を持っています。主がイザヤに戒められましたね。「8:12 あなたがたは、この民が謀反と呼ぶことを何一つ謀反と呼ぶな。この民が恐れるものを恐れてはならない。おびえてはならない。」世の流れのものを、主の御名によって後追いするのではなく、たとえ逆流しても、真理のこばを語り告げるのです。

そして、「なつめ椰子の葉も葦も」と言っていますが、これは、民のことです。彼らは、ただ風に揺らぐ存在です。主イエスは、そのような揺らぐ存在に対して、優しく、柔和に接して、彼らが神に立つことができるようにされたことを思い出してください。主が、群衆の多くを癒されましたが、そのことを人々に知らせないように言われました。マタイは、それはイザヤの預言が成就するためだと言っています。「12:20 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない。さばきを勝利に導くまで。」このように、葦のような存在です。そして葉っぱのような存在でもあります。イエス様は、エルサレムに入られる時に、実を結ばせていないいちじくの木が、葉っぱだけであることに気付きました。そうして、のろわれました。すると、次の日に、弟子たちが、根こそぎ枯れているのを見ました。葉は茂っているけれども、実を結ばせていない姿は、ユダヤ人たちが神に対して、実を結ばせていない姿だったのです。

<sup>17</sup> それゆえ、主はその若い男たちを喜ばず、そのみなしごも、やもめも、あわれまない。皆が神を敬わず、悪を行い、すべての口が愚かなことを語っているからだ。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

若い男を喜ばない、とは、兵士として戦って、次々と殺されていくということです。それで、みなしごも、やもめも、たくさん出てきます。けれども、主は憐れむことはありません。なぜならば、それで主に立ち返るわけではないからです。神を敬わない、悪を行っている。それから、愚かなことを語っているからです。

### 3B かみ合う民 18-21

<sup>18</sup> まことに、悪は火のように燃えさかり、茨とおどろをなめ尽くし、林の茂みに燃えついて、煙となって巻き上がる。<sup>19</sup> 万軍の主の激しい怒りによって地は焼かれ、民は火の餌食のようになり、だれも互いにいたわり合わない。<sup>20</sup> 右にかぶりついても、なお飢え、左に食らいついても、満たされず、それぞれ自分の腕の肉を食らう。

イスラエルは、敵によって火で燃えて、それで、民は食べ物がなくなります。そこで、人々が助け合うのではなく、むしろ、いたわり合わずに、我先にわずかな食べ物を奪い合うようになるのです。それで、自分たちを食べる、共食いが、文字通り起こりました。

<sup>21</sup> マナセはエフライムを、エフライムはマナセを、そして彼らはともにユダを敵とする。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

神を敬わず、悪を行い、愚かなことを語っている中で、彼らは互いに争うようになります。初めは、北イスラエルの中で争います。それから、ユダを敵視して、戦いを挑みます。私たちが7章で見たとおりです。

私たちは霊的に枯渇すると、同じように互いにかみ合い、戦うようになっていきます。御霊によらず、律法の行いによって救いを完成しようとしたガラテヤ人たちについて、パウロが警告しました。「ガラ5:15 気をつけなさい。互いに、かみつき合ったり、食い合ったりしているなら、互いの間で滅ぼされてしまいます。」

### 4B 不正な裁判 10:1-4

<sup>1</sup> わざわいだ。不義の掟を制定する者、不当な判決を書いている者たち。<sup>2</sup> 彼らは弱い者の訴えを退け、私の民のうちの貧しい者の権利をかすめる。こうして、やもめは彼らの餌食となり、みなしごたちは奪い取られる。

みなしごや、やもめがたくさん出てきている、この苦しみの時に、こともあろうに、法律を変えて、不当な判決が出るようにするという悪事を行います。当時の世界は、今のように福利が発達しているわけではありません。王の働きは、やもめやみなしごのような弱く、虐げられる者たちを、正し裁きで救い出すことが正義でした。それにもかかわらず、その真逆のことは行うのです。要は、憐れみがなくなるのです。互いにいたわらず争い、そして弱い人々を切り捨てていく社会です。

主は、律法の中で、やもめやみなしごを守らなければ、ご自身の怒りを示すことを語られています。「出 22:22-24 やもめ、みなしごはみな、苦しめてはならない。もしも、あなたがその人たちを苦しめ、彼らがわたしに向かって切に叫ぶことがあれば、わたしは必ず彼らの叫びを聞き入れる。」

そして、わたしの怒りは燃え上がり、わたしは剣によってあなたがたを殺す。あなたがたの妻はやもめとなり、あなたがたの子どもはみなしごとなる。」それゆえ、主は御怒りをはっきりと現します。それが、アッシリアによる攻撃です。

<sup>3</sup> 訪れの日、遠くから嵐が来るときに、あなたがたはどうするのか。だれに助けを求めて逃げ、どこに自分の栄光を残すのか。<sup>4</sup> ただ、捕らわれ人の足もとに膝をつき、殺された者たちのそばに倒れるだけだ。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

遠くから嵐が来るというのは、遠くの国アッシリアからの攻撃です。その時は、自分たちは大丈夫だと思っていたけれども、他の人たち、捕らわれた人々の足元にひざを付きます。そして、殺された人と共に倒れます。それでも、悔い改めないという有様です。

## **2A 神の主権を認めない国 10**

このようにして、神は北イスラエルを裁くのに、アッシリアを用いられます。しかし、器として選ばれていることが、彼らを正当化するものではありません。北イスラエルが、自分たちの力で建て直せると高ぶったのと同じように、アッシリアは自分たちの力で征服しているのだとごりまします。その高ぶりのゆえ、今度はアッシリアを裁くことを宣言されます。

### **1B 国々を倒す欲望 5-11**

<sup>5</sup>「ああ、アッシリア、わたしの怒りのむち。わたしの憤りの杖は彼らの手にある。<sup>6</sup> わたしは、これを神を敬わない国に送り、わたしが激しく怒る民を襲えと、これに命じる。物を分捕らせ、獲物を奪わせ、道端の泥のように、これを踏みにじらせる。

これは、アッシリアがイスラエルを倒す時に、主権者である神の御手がずっとあったことを示しています。「神を敬わない国」「わたしが激しく怒る民」と、主は言われています。しばしば、神のことを悪く言う人は、「神は、善なのに、どうしてこうした悪を許すのか？」と問いかけます。それへの答えは、「あなた自身が、災いが降りかかったことを他人事のようにして見ないで、あなたも悔い改めなければ、このようになるのだ。」という注意喚起なのです。主が用いられているのです。

<sup>7</sup> しかし、彼自身はそうとは思わず、彼の心もそうは考えない。彼の心にあるのは滅ぼすこと、少なからぬ国々を絶ち滅ぼすことだ。

主が、アッシリアを用いられているからと言って、アッシリアを正当化しているわけではありません。イスラエルもかつて、カナン人を追い出すけれども、彼らが正しいからではないからだということも言われました。アッシリアは、主権者である神を度外視して、ただ滅ぼすこと、国々を絶ち滅ぼすことだけを考えていました。これは、まさにサタンと同じ姿です。高ぶり、そして滅ぼすのです。

<sup>8</sup> というのは、彼がこう思っているからだ。『私の高官たちはみな王ではないか。

これは、帝国主義の考え方です。それぞれの国の王は、自分の手下であるということです。諸々の国々の上に、アッシリア帝国があり、征服して支配下に置いています。しかし、王を立てるのも、倒すのも神です。そして、王の王、主の主と呼ばれているのも神です。アッシリアの王は、自分自身を主権者なる神といっしょにみなしています。

<sup>9</sup> カルノもカルケミシュのよう、ハマテもアルパデのようではないか。サマリアもダマスコのようではないか。<sup>10</sup> エルサレム、サマリアにまさる刻んだ像を持つ、偽りの神々の王国を私が手に入れたように、<sup>11</sup> 私はサマリアとその偽りの神々にしたように、エルサレムとその多くの偶像にも同じようにしないだろうか』と。」

高ぶりを増し加えていく姿が、はっきりと出ています。アッシリアは、初めにアラムの地域から征服していきます。ユーフラテス河畔にあるカルケミシュを征服した後に、アラムのカルノの町を征服します。そして南に下って、アルパデを倒して、ハマテに下ります。そして、アラム王国の首都ダマスコを倒して、それからサマリアに行きます。自分の成功体験を積み上げて、それで自分がいかに力あり、優れていて、主権者なのだと、自分を高めて行っているのです。

サマリアでは、ダンとベテルで金の子牛を抱いていました。それらを倒します。ところで、当時、国々は、自分たちを代表する神々を有していました。国と国が戦うときに、その国が代表する神々の戦いとみなしていました。それで、アッシリアは、自分の神が、これらの町々よりも偉大であるとみなしていききました。そして今、サマリアでも、その神々に打ち勝ったのであるから、エルサレムにおいても、その偶像も同じようにするのだと豪語しているのです。

ここにおいて、アッシリアは一線を越えました。このことについて、第二歴代誌で、著者がこのように述べています。「32:19 彼らは、人の手のわざである、地上の民の神々について語るのと同じように、エルサレムの神について語ったのである。」主なる神を、まるで他の神々と同じように語ったのです。主が、いと高き方であるのに、それを一気に引き下げたこと、これがイスラエルの神を怒らせました。私たち人間が、自分を高めたいために、神をまるで自分たちと同じように語ることによって、神の栄光をすべて見えなくさせるのです。

## 2B 造り主への器の高ぶり 12-19

<sup>12</sup> 主はシオンの山、エルサレムで、ご自分のすべてのわざを成し遂げるとき、アッシリアの王の思い上がった心の果実、その高ぶる目の輝きを罰せられる。

シオンにおられる方は、天地を造られた方です。この時に、打ちひしがれて、けれども心を主に

注いだヒゼキヤ王は、こう祈りました。Ⅱ列王 19:15-19

15「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、【主】よ。ただ、あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。16【主】よ。御耳を傾けて聞いてください。【主】よ。御目を開いてご覧ください。生ける神をそしるために言ってよこしたセンナケリブのこぼを聞いてください。17【主】よ。アッシリアの王たちが、国々とその国土を廃墟としたのは事実です。18 彼らはその神々を火に投げ込みました。それらが神ではなく、人の手のわざ、木や石にすぎなかったため、彼らはこれを滅ぼすことができたのです。19 私たちの神、【主】よ。どうか今、私たちを彼の手から救ってください。そうすれば、地のすべての王国は、【主】よ、あなただけが神であることを知るでしょう。」

この祈りを主は聞かれました。そして、アッシリアの心の果実、その高ぶる目の輝きを罰せられるのです。一夜にして、主の使いによって、十八万五千人のエルサレムを包囲するアッシリア軍を滅ぼされました。

13 それは彼がこう言ったからである。「私は自分の手の力でやった。私の知恵でやった。私は賢いからだ。私が諸国の民の境を取り払い、彼らの蓄えを奪い、全能者のように住民をおとしめた。<sup>14</sup> 私の手は、諸国の民の財宝を巢のようにつかみ、私は、見捨てられた卵を集めるように地のすべてのものを集めたが、翼をはためかす者も、口を大きく開ける者も、鳴く者もいなかった。」

分かりますね、「私が、私が」と、主が私になっています。主の世界ではそうではありません。「ロマ 11:36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」すべては、神が主語なのです。

15 斧は、それを使って切る人に向かって高ぶることができるだろうか。のこぎりは、それをひく人に向かっておごることができるだろうか。それは、むちが、それを振り上げる人を動かし、杖が、木ではない人間を持ち上げるようなものではないか。

人が、おごり高ぶることの愚かさが描かれています。器自体が、器を使っている人を動かしていると思ったら、それほど滑稽なことはありません。しかし、人が高ぶっている時は、この愚かなことを事実、考えているのです。自分が神のように、なんでもできるのだと考えている。それは、自分がこれまで、いろいろなことをやって、その通りになっていくと、自分自身がそれを動かしていると思ってしまうのです。

16 それゆえ、万軍の主、主は その最も肥え太った者たちをやつれさせ、その栄光のもとで、炎が燃え上がる。<sup>17</sup> イスラエルの光は火となり、その聖なる方は炎となる。燃え上がって、そのおどろと

茨を 一日のうちになめ尽くす。

これは、エルサレムを包囲したアッシリア軍が、一気に滅んだことを預言しているものです。イスラエルには、目に見える防備はありませんでしたが、主ご自身が炎となり、なめ尽くしてくださいました。主は、このようにして私たちのために戦ってくださいます。

<sup>18</sup> 主はその美しい林も果樹園も、また、たましいも、からだも滅ぼし尽くし、それは病人が痩せ衰えるときのようになる。<sup>19</sup> その林の木の残りは数えるほどになり、子どもでもそれらを書き留められる。

これは比喩的に、その後のアッシリアの破滅を預言したものです。アッシリアの王センナケリブは、陣をたたんで去って、首都ニネベに帰りました。そして、彼の終わりが次のように書いてあります。「37:38 彼が自分の神ニスロクの神殿で拝んでいたとき、その息子たち、アデラメレクとサルエツェルは、剣で彼を打ち殺した。」自分が自分の神を拝んでいた時に、息子たちに殺されたのです。そしてアッシリアは、バビロンに滅ぼされることとなります。ナホム書には、ニネバが陥落する預言があります。

### 3B 残りの民の立ち返り 20-26

<sup>20</sup> その日になると、イスラエルの残りの者、ヤコブの家の逃れの者は、もう二度と自分を打つ者に頼らず、イスラエルの聖なる方、主に真実をもって頼る。<sup>21</sup> 残りの者、ヤコブの残りの者は、力ある神に立ち返る。

「その日になると」とあります。これは、アッシリアに攻められる当時のエルサレムのみならず、主がご自分の計画を完成される、究極の主が定められた日、終わりの日ということです。イスラエルでも残された者たちを、主は聖別してくださいます。

そこで彼らが行ったことが貴重です。「自分を打つ者に頼る」というのは、アッシリアのように、アハズが自分を守るために自分をいじめる者に抛り頼むという、あまりにも自虐的な自傷行為のことです。終わりの日も、彼らは神殿を建てることについての契約を、多くの者が反キリストと結ぶこととなります。しかし、反キリストは三年半の後に、その正体を現して、至聖所に入って、自分こそが神だと宣言するのです。しかし、残された者たちは荒野に逃げ、悔い改めて、メシアを求めます。ここに、「イスラエルの聖なる方、主に真実をもって頼る。」と言っている通りです。その時に主イエスが、天から戻ってきてくださいます。それで、救われるのです。

同じように、私たちが御霊に抛らず、肉に抛り頼む時に、自分で自分を痛めつけている自傷行為を行っています。しかし、私たちが恐れずに、心を砕いて、主の前に自分自身を持って行く時に、主はその心を癒してくださいます。そして敵から救うという御業を行ってくださいます。21 節、「残

りの者が、立ち返る」という言葉は、これはイザヤの息子「シェアル・ヤシュブ」と同じです。

<sup>22</sup> たとえ、あなたの民イスラエルが海の砂のようであっても、その中の残りの者だけが帰って来る。壊滅は定められ、義があふれようとしている。<sup>23</sup> すでに定められた全滅を、万軍の神、主は、全地のただ中で起こそうとしておられる。

イスラエルの民が数多くいても、残りの者だけが立ち上がるという言葉も大切です。パウロはこれを、イエスを信じるユダヤ人のことを指してローマ書 9 章 27-28 節で引用しています。つまり、イスラエルの血縁的子孫だからと言って、自動的に救いに預かるのではないということです。彼らも狭き門であられる、イエス・キリストを信じて受け入れなければ滅んでしまうということです。そして、イスラエルの救いの時には、全世界を神が義によって裁かれます。

<sup>24</sup> それゆえ、万軍の神、主はこう言われる。「シオンに住むわたしの民よ、アッシリアを恐れるな。彼がむちであなただを打ち、エジプトがしたように杖をあなたに振り上げても。<sup>25</sup> もうほんの少しでわたしの憤りは終わり、わたしの怒りは彼らを滅ぼしてしまうから。

話を、アッシリアの脅威に主は戻しておられます。アッシリアは、まさにテロ国家でした。人々を生きのまま手足を切ったり、生きのまま皮膚をはいたり、串刺しにしたりします。そうやって恐怖を呼び起こし、服従するようにさせていくのです。だから、シオン、すなわちエルサレムに住む人々は恐れるのは、当たり前のことなのです。けれども、主は、彼らがむちで打つようなことがあっても、エジプトの時、奴隷として杖が振り上げられましたが、そのような目にあっても、その憤りは長く続かないと励ましておられます。ヒゼキヤ王と民がエルサレムを取り囲まれた時は、何年も続くというものではありませんでした。同じように、私たちにも、主からの試練は耐えられないようなものではありません。

<sup>26</sup> オレブの岩でミディアンを打ったときのように、万軍の主が彼にむちを振り上げる。杖を海にかざして、エジプトにしたようにそれを上げる。

ギデオンたちが、ミディアン人の王オレブをオレブの岩で殺した、とあります(士師 7:25)。また、出エジプトの時にエジプト軍を紅海で沈めた時のようなことをすると言われます。力をもって、裁かれるということです。

<sup>27</sup> その日になると、彼の重荷はあなたの肩から、彼のくびきはあなたの首から除かれる。くびきは脂肪のゆえに外される。」

主が力強く、アッシリアを滅ぼされることで、ヒゼキヤとエルサレムの住民は、重荷が肩から除か

れるような、くびきが首から除かれるような解放を味わいます。

#### 4B 倒れる高い木 28-34

<sup>28</sup> 彼はアヤテに着き、ミグロンを過ぎ、ミクマスに荷を置く。<sup>29</sup> 彼らは峠を過ぎ、ゲバで野営する。ラマはおののき、サウルのギブアは逃げる。<sup>30</sup> 娘ガリムよ、甲高く叫べ。よく聞け、ライシャよ。哀れなアナトテ。<sup>31</sup> マデメナは逃げ去り、ゲビムの住民は避難する。<sup>32</sup> その日のうちに彼はノブで立ちどまり、娘シオンの山、エルサレムの丘に向かって手を振り上げる。

これらの町々の名前は、それぞれどこにあるかを調べると鮮明な臨場感に包まれます。アヤテというのは、ヨシュア記のアイの町と同じです。エルサレムから十数キロ北にある町です。そしてミグロン、ミクマスと南下してきています。ゲバ、ラマ、ギブア、ガリム、ラユシャと、どんどん南、南へ進んでいることがわかります。そしてノブはエルサレムに隣接する町です。今のスコパス山だと言われます。オリーブ山の北にある山です。そこからエルサレムを眺めると、北から南にあるエルサレムを一望できます。そこで手を振り上げたわけです。

<sup>33</sup> 見よ、万軍の主、主が恐ろしい勢いで枝を切り払われる。丈の高いものは切り倒され、そびえたものは低くなる。<sup>34</sup> 主は林の茂みを鉄の斧で切り倒し、レバノンに力強い方によって倒される。

主は、アッシリアの力を、丈の高い木のように形容しておられます。これは、エゼキエル書にも、その高ぶった姿を、生い茂った高い木に例えています。ダニエル書では、バビロンがそのように描かれていましたね。ネブカドネツアルは、切り倒されて、根株のみとなりました。それで、へりくだって、理性が戻ってきた時には、主なる神をほめたたえたのです。

このようにして、高ぶりについて私たちは見てきました。箴言には、「16:18 高慢は破滅に先立ち、高ぶった霊は挫折に先立つ。」とあります。私たちが、豊かにされた時に、気を付けなければいけないですね。調子よくいった時に、気を付けなければいけません。すべてが、神から来て、神から与えられていないものは、何一つないのです。ヨブのように、神を恐れるのです。主は与え、主は取られる方です。すべて、主によるのです。